

やけど（熱傷）に対する応急手当

やけど（熱傷）は、熱いお湯や油が体にかかったり、炎ややかんなど熱いものに触れたりすると起こります。あまり熱くない湯たんぼなどが、体の同じ場所に長時間当たっていた場合（低温熱傷）や、塩酸などの化学物質が皮膚についた場合（化学熱傷）にもなることがあります。

1 やけどの応急手当の方法

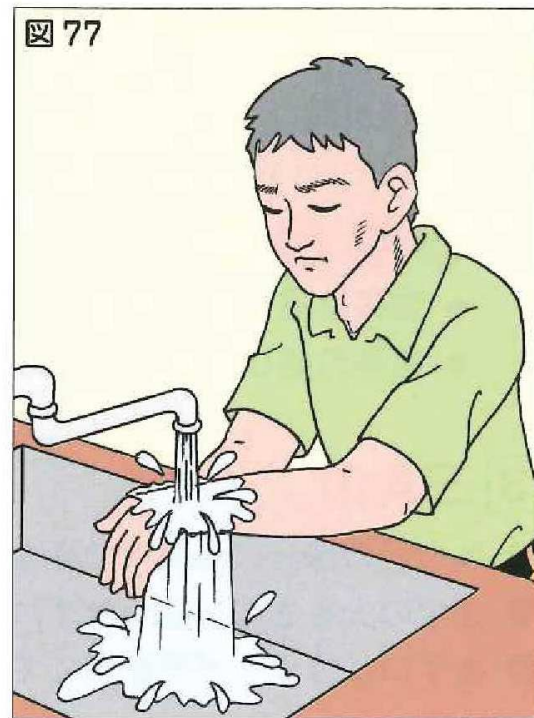
● 水で冷やす

やけどは、すぐに水で冷やすことが大切です。やけどを冷やすと、痛みが軽くなるだけでなく、やけどが悪化することを防ぐこともできます。

ポイント

- できるだけ早く、水道水などの清潔な流水で十分に冷やします。
- 靴下など衣類を着ている場合は、衣類ごと冷やします。
- 氷やアイスパックを使って冷やすと、冷えすぎてしまい、かえって悪化することがあるので注意します。
- 広い範囲にやけどをした場合は、やけどの部分だけでなく体全体が冷えてしまう可能性があるため、冷却は10分以内にとどめます。

図 77



やけどの冷却

2 やけどの程度と留意点

やけどが軽いか重いかは、やけどの深さと広さで決まります。

● 一番浅いやけどの場合

- 一番浅いやけどは、日焼けと同じで皮膚が赤くなりひりひりと痛みますが、水ぶくれ（水疱）はできません。
- このような場合には、よく冷やしておくだけで、ほとんどは病院に行かなくても自然に治ります。

● 中ぐらいの深さのやけどの場合

- 中ぐらいの深さのやけどは、水ぶくれができるのが特徴です。
- 水ぶくれは、やけどのきず口を保護する役割があるので破いてはいけません。すぐに水で冷やした後、指先などのごく小さいやけどを除いては、ガーゼやタオルで覆って水ぶくれが破れないように気をつけて、できるだけ早く医療機関を受診するようにします。
- なお、水ぶくれが破れても薬などを塗ってはいけません。
- ガーゼやタオルで覆いきれないような大きな水ぶくれになったときは、救急車を呼ぶことも考えます。

● 最も深いやけどの場合

- 最も深いやけどは、水ぶくれにならずに皮膚が真っ白になったり、黒く焦げたりしてしまいます。やけどがここまで深くなると、かえって痛みをあまり感じなくなります。
- このようなやけどは治りにくく、手術が必要になることもあるので、痛みがないからといって安心せずに、必ず医療機関を受診します。

ポイント

- 小さな子どもや老人は、比較的小さなやけどでも命に関わるがあるので注意します。
- 火事などで煙を吸ったときは、やけどだけでなく喉や肺が傷ついている可能性があるため、救急車で医療機関に行く必要があります。

119番通報が必要な場合

- やけどが広い範囲にわたっている場合や、顔面や陰部のやけどまたは皮膚が焦げていたり白くなって痛みを感じないような深いやけどの場合は、119番通報してください。